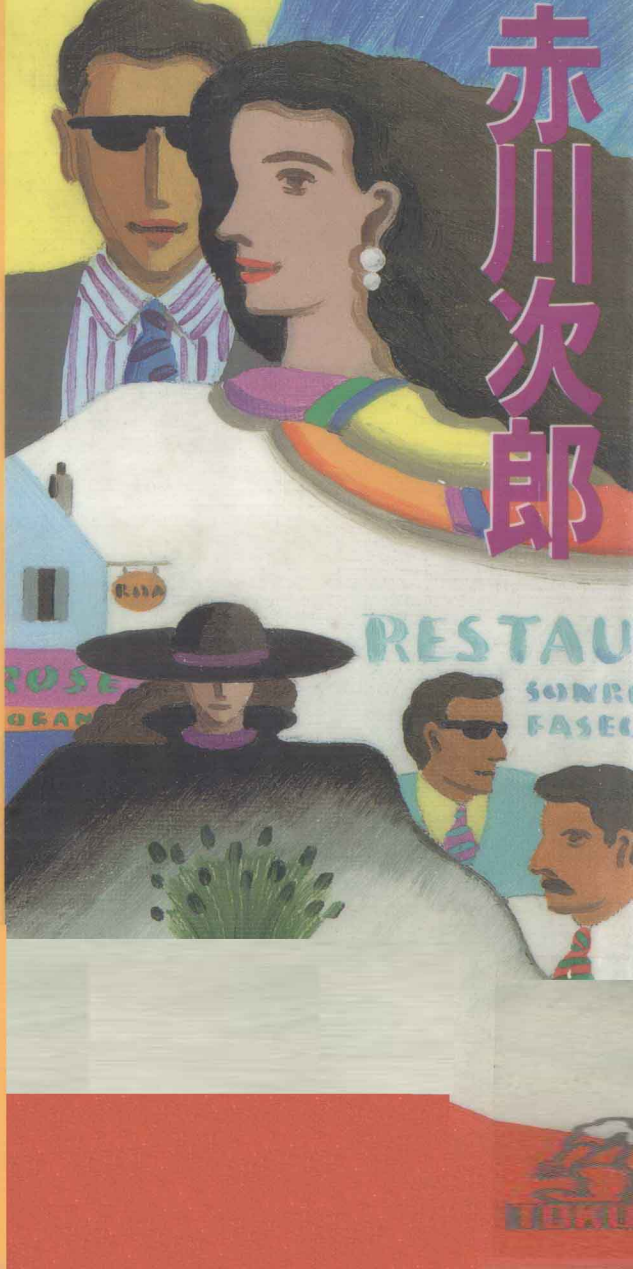
泥棒は三文の得

TOKUMA NOVELS

ユーモア・ピカレスク

赤川次郎



TOKUMA NOVELS

赤川次郎
泥棒は三文の得

発行者　徳間康快
発行所　徳間書店
東京都港区新橋四の一〇　郵便番号一〇五-五五
電話三四三二・六二三二　振替東京四-四四三九二一

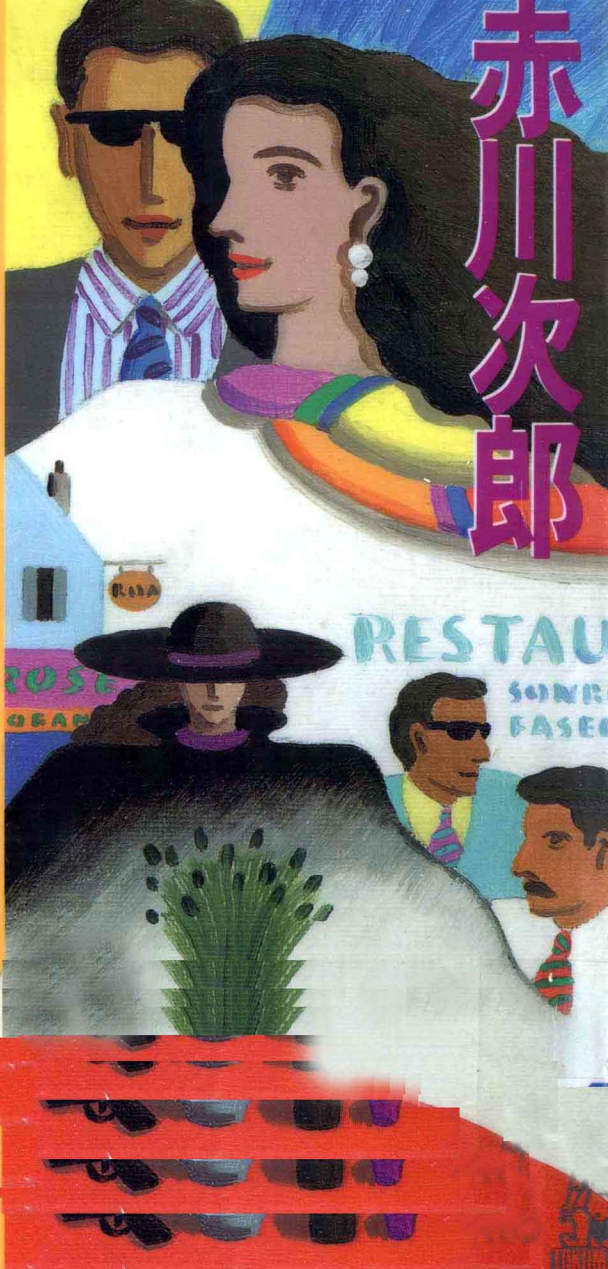
©Jirô Akagawa 1993
落丁・乱丁はおとりかえいたします

Printed in Japan　〈編集担当　芝田　暁〉

泥棒は三文の得

TOKUMA NOVELS ユーモア・ピカレスク

赤川次郎



ISBN4-19-155221-X

C0293 P750E (0)

定価＝750円(本体＝728円)

泥棒は三文の得

赤川次郎

多くの読者を魅了し続けている夫は泥棒、妻は刑事の異色コンビが大活躍するシリーズも本書で第九弾目。息のぴったり合った淳一と真弓の見事な二人三脚ぶりはもちろんのこと、間抜けだが愛すべき名脇役・道田刑事の存在も人気の秘密にちがいない。

TOKUMA NOVELS

ユーモア・ピカレスク

泥棒は三文の得

赤川次郎

徳間書店

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

目次

毒薬は口に甘し ―― 7
夜目、遠目、丸の内 ―― 45
親は泣いても、子は育つ ―― 89
無理が通れば道路がひっこむ ―― 127
知らぬが仏も三度まで ―― 171

本文挿画・水田秀穂

毒薬は口に甘し

「ただいま」
と、今野淳一は言った。「――何してるんだ？」
「あら、お帰りなさい。早いのね、まだ三時よ」
「うん。今夜は下調べだけだからな」
三時といっても、午後の三時ではない。午前三時。それでも「早い」のは、今野淳一が「夜の商売」――泥棒だからである。
「お前はいつ帰ったんだ？」
「一時ごろかしら」
と、妻の真弓が言った。「で、下見はどうだったの？」
「うん。まあ問題なさそうだ」
「そう。じゃ、頑張ってね」
真弓が淳一を励ますのも妙なものだ。
というのも、夫は前述の通り泥棒だが、妻の方は刑事だからである。
もっとも、夫婦の間には、お互い干渉しない（もちろん仕事の上だけだが）という原則がある。ただし、夫婦愛にもとづいて、時として助け合うことも、ないではないが……。
真弓に言わせれば、
「愛は、すべての原理原則を越えてるんだからね」
ということになる。
「ところで、今夜は――」
と、淳一が言いかけると、居間の方で、
「ウーン……」
と呻く声が聞こえて来た。

「おい。誰かいるのか」
と、淳一は訊いた。
「誰か、ってほどのもんじゃないけどね」
すると、その呻き声に、
「真弓さん……」
という呟きが混った。
「道田君じゃないか」
「そうだった？　忘れてたわ、誰だか」
真弓の部下の、若き独身刑事である。
淳一は居間を覗いて、道田がカーペットの上に大の字になってのびているのを見た。ズボンのベルトが外してあって、ファスナーが半分くらい下りているという、あまり見映えの良くない格好だった。
同時に、居間の中は、いやに甘ったるい、ムッとするような匂いがした。

「おい、一体道田君をどうしたんだ？」
淳一は、苦しげに、半ば意識ももうろうとしている様子の道田を見下ろして、言った。
「何も」
と、真弓は肩をすくめてから、「――あなた」
「何だ？」
「私が、この人を押えつけて、無理やり浮気したと思ってるんでしょ！　そうね？」
無理やり浮気した、ってのも妙な表現である。
「誰も、そんなこと言ってないぜ」
「分ってるわよ！　あなたの顔に、そう書いてある」
「じゃ、消しゴムで消すか」
「妬いてるの？　目がギラギラしてるわよ」
「そりゃ、自分の方だろ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton

「道田君と浮気したかどうか、知りたい？」
「分ってるよ、そんなことじゃないぐらい」
「教えてあげるわ。――ベッドでね」
こうなると、真弓には何を言ってもむだなのである。
淳一は、ため息と共に妻との「対話」に専念すべく寝室へ向い、居間の床には、相変らず呻いている道田一人がとり残されたのだった……。

「ケーキだって？」
と、淳一は言った。「食べるケーキか」
「不景気なんてものもあるけどね」
と、真弓は、バスローブをはおって、ソファに身を沈めた。
二人して、やや長めの「対話」の後、寛いでいるところである。
「今度の事件はね、ケーキが絡んでるの」
「ケーキ殺人事件か」
「国賓級の偉いお客様を、フランス料理でお迎えすることになって、メニューは決ったんだけど、デザートをどうするかで、もめたんですって」
「そんなもので、もめるのか」
「その中で人殺しがあったわけ。で、捜査に行った洋菓子店でね、おみやげにケーキを十五個、もらって来たの」
「おみやげつきか、最近の殺人事件の捜査ってのは」
「で、持って帰って来て、私は一つ食べたの。なかなかおいしかったのよ。でも、残る十四個は、とても食べ切れないし、大体太るでしょ、あんまり食べ

ると。でも、作った人は、『本日中にお召し上り下さい』って言ってたから、だめにするのはもったいないし、道田君に、『残りは食べて』って言ったの」
「おい……」
淳一は唖然として、「じゃ——道田君一人で十四個も食べたのか？」
「十三個よ。あなたに一個残してあるわ。今夜中に食べてね」
たぶん道田は、当分、ケーキの化物に追い回される夢を見ることになるだろう……。
それはさておき——。
「すると、言い争う声を聞いたのね？」
と、真弓は言った。
「はい」
と、答えたのは、ヒョロリとやせた若者で、いささか女性的な印象を与える。
それは、体から匂う、どことなく甘い香りのせいかもしれなかった。
「井上君、だったわね。コックなの？」
「見習です」
と、井上博夫は少し照れた様子で、「まだまだ当分は、本物のコックにはなれませんよ」
「でも、まだ若いじゃないの。二十……」
「二十二です。だけど、世界的に有名なコックはたいてい二十代で名をあげるんです。僕も一応、三十になる前に、シェフになりたいと頑張ってるんですけど……」
井上博夫という、その若者、確かになかなか爽やかで、真弓は気に入った。

「でも——殺人事件とはね」
真弓は調理場の床に、白い布をかぶせてある死体を見下ろして、ため息をついた。
それにしても、広い調理場だ。
「うちの台所とは大違いね」
と、真弓はもっともなことを言った。
「レストランの広さと、この調理場の広さと、同じくらいあるんです」
と、井上は言った。「いい料理を出そうと思うと、どうしても、これぐらい必要なんですよ」
「じゃ、うちも一階全部、台所にしようかしら」
いくら広くしたって、料理しなきゃ同じことだ、と淳一がいたら、冷やかしただろう。
真夜中の十二時。——真弓は、事件発生の報を、捜査一課で聞いた。

残業していたのは、前の事件の報告書を、道田と二人で書いていたからで、二人の共同作業は一向にはかどらなかった。
それというのも、真弓が少し書き進める度に、道田刑事が、
〈このときの今野真弓刑事の活躍は目ざましいものがあり、正に全警察官の誇りであると考えます！〉
といった「真弓讃歌」を間に挟んでいたからである。
また、真弓の方も、
「〈女らしい優しさにも欠けていない〉って付け加えちゃどう？」
なんてやるもんだから、ますます進まない。
事件の知らせで、二人はむしろホッとして飛んで来たのだった……。

銀座にある超一流フランス料理レストラン。そこの調理場で死体が見付かったのだから、何とも場違いという感じである。
「いつも、こんなに遅くまで、調理場にいるの？」
と、真弓は井上に訊いた。
「いえ、店が十時に閉りますから、日によっては十二時近くになることもありますけど、たいていは十一時ごろ、引き上げます」
「で、今夜は？」
「十一時に出ました。いつもは僕が最後なんです。ガスの栓とか、戸締りも全部見て帰ります」
と、井上は言って、「ただ、今夜は——近々、外国の偉い方がみえるっていうんで、大倉さんが残っていました。大倉さんは、ここのシェフです」
「確か今、こっちへ向ってもらってるわ」
真弓は、ポカンとして調理場の中を見回している道田の方へ、「ね、道田君？」
と、念を押した。
「は、はい！　立派な鍋ですね」
「そんなこと訊いてるんじゃないわよ！」
と、真弓は道田をにらんだ。
「すみません」
と、道田がしょげていると、笑い声がした。
「あら、矢島さん」
検死官の矢島が、まるでＴＶの調子でも見に来た、といった様子で、フラッと入って来る。
「相変らず、道田君をいじめてるのか？　可哀そうに」
矢島は、いつも真弓をからかうのである。
「いじめたりしていませんよ。ねえ、道田君？」

「もちろんです！　真弓さんのお叱りは、〈愛の鞭〉ですから」
「いつ私が鞭でぶった？」
と、真弓が不服げに言った。「それより、死体の方をみて下さいよ」
「うむ。――食い過ぎて死んだかな」
と、矢島は調理場の中を見回した。「ここが有名なフランス料理店の台所か」
「矢島さん、フランス料理に詳しいんですか？」
「オムレツなら、時々食べる」
軽口を叩きながら、死体を覆っていた布をとる。
――これも、無用な緊張を避け、リラックスする方法なのかもしれない。
「――何だ」
と、矢島は、死体を一目見て言った。「宇津木じゃないか！」
真弓は、死体の方へかがみ込んだ。
五十歳ぐらいの印象。ツイードの上着はなかなか上等である。
「お知り合い？」
「というほどでもない。しかし、この商売をやっとると、いやでも名前が頭に入る」
「誰なんです？　死因は？　人に恨まれるような人間ですか」
「いっぺんに色んなことを訊くな。わしゃ聖徳太子じゃない」
と、矢島は言った。「この男は宇津木といって――毒薬の専門家だ」
真弓は、思わず道田と顔を見合せた。
矢島の言葉は、当然、コック見習の井上の耳にも

入った。
「あの――今、毒薬、とおっしゃったんですか？」
と、死体の方へこわごわやって来る。
「そうだ。毒薬を扱わせれば、天下一品だったな。しかし――見たところ、外傷もない。どうやら、宇津木自身、毒で命を落としたのかもしれんな」
「毒薬の研究家だったんですか」
と、真弓は訊いた。
「研究というより実践だ」
「というと？」
「要は、毒薬を使っての人殺しを請け負っていた男だ、ってことさ」
「じゃあ……殺し屋ですか！」
真弓は仰天した。「その殺し屋がどうしてこんな所に……」
「さてな。わしゃ、この男じゃないから、知らんよ」
と、矢島は理屈に合ったことを言った。
「調理場に、毒薬を使う殺し屋の死体……。もしかすると、とんでもないことになりますね」
真弓は、青ざめている井上へ、「――さあ、続きを話してちょうだい。どうしてここへ戻って来たの？」
「はあ……。初めは忘れものをしたんです。で、取りに戻りました。ところが、そこの裏口――従業員用の口から入ろうとすると、中で大倉さんが、『いい加減にしろ』と怒鳴っていたんです。それで、僕は何だか入って行きそびれて……。鍵は持ってますから、少し間を置いて来ようと思ったんです」
「大倉さんってシェフね？　相手は誰だか分った？」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.erton